

地方県の非都市部の高校における進路指導
—都市部における高校格差構造との偏差から見えるもの—

田垣内 義浩（東京大学）

Career Guidance in Non-Urban High Schools in Rural Provinces:
What Can Be Seen through the Deviation from the Structure of High School Disparity in Urban Areas

Yoshihiro TAGAITO
The University of Tokyo

Authors' Note

Yoshihiro Tagaito is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo

This research was supported by a grant, Young Scholar Training Program from Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research (CASEER), Graduate School of Education, The University of Tokyo

Abstract

After confirming the high role that career guidance plays in providing educational opportunities for students in high schools in rural areas, this paper has identified the actual state of high school career guidance in rural areas. This paper reveals two main findings.

First, X High School, the case study school, is one of the few high schools in the area that meet the needs of various career paths, from difficult-to-enter universities to employment. Therefore, there is no policy that necessarily favors college admission, and there is a possibility that students are not being guided to pursue as high a career path as possible. Second, the diversity of the student body at X High School makes it difficult to set a single vector of guidance, and we find that it is difficult to move in the direction of higher career paths. Based on the first and second points above, it is found that career guidance is left to the initiative of the students.

Urban areas have many high schools, and it is a Japanese characteristic that each high school is ranked in a hierarchical manner according to academic ability. In such a context, unlike in non-urban areas, it is possible to provide efficient instruction tailored to each high school's academic ability band. Thus, more analysis focusing on the regional context of tracking is needed in the future.

Keywords : tracking in rural areas, career guidance, diversity in a high school

地方県の非都市部の高校における進路指導

—都市部における高校格差構造との偏差から見えるもの—

1 問題の所在

本稿は、地方県の非都市部の高校において、いかなる背景のもと、どのような進路指導が実践されているのか明らかにすることを旨とする。その際には、都市部における高校格差構造でみられる理念型との比較によって、その特徴を鮮明に描き出すことを試みる。結論を先取りするならば、非都市部の高校ではリソースの制約（田垣内 2022）とともに、(1) 「地域の高校」として多種多様な進路ニーズに対応することが目標となること、(2) 生徒が多様なために指導のベクトルを一つに設定することが困難なこと、の 2 点がみられることが都市部との比較からわかった。以上を背景に、地方県の非都市部では、大学進学を目指す機運を全体的に高めていく実践を行うことが困難となっていることを考察として述べる。

地方の中でも、県庁所在地などの都市部ではない、地方県の非都市部において大学進学率がとりわけ低いことは容易に想像できるだろう（多田 2019、田垣内 2022 など）。この事実はすなわち、地方県の非都市部に位置する高校に非進学校が多く、それら高校からの大学進学機会が閉ざされがちであることを意味している。

近年、非進学校からの大学進学機会の提供には高校の進路指導による水路づけが重要な役割を果たしていることが度々指摘されている（千葉・大多和 2007、酒井編 2007、荒川 2009、中村編 2010、豊永 2023 など）。これらの知見を踏まえるならば、そのような非進学校が多い地方県の非都市部（田垣内 2023）における大学進学の可能性を考えていく際には、とりわけ高校側の要因に

スポットライトを当てていくことが重要であるといえる。そうすることで、地方県の非都市部における進路実態の背景や教育機会の提供にみられる困難性をより明らかにできるのではないだろうか¹⁾。

この通り、教育機会の平等を考える上で、地方県の非都市部の高校における進路指導実践は教育社会学的に無視できない論点にもかかわらず、教育機会の地域的不平等が都道府県レベルでの議論に終始しがちであったこともあり（東京都と比べた沖縄県など）、実はほとんど注目が寄せられてこなかったのが現実である（例外として、吉川 2001、上地 2019、田垣内 2022 など）。

以上の課題を踏まえて、本稿では非進学校からの大学進学を左右する存在としての高校の進路指導の内実とその背景をつぶさに明らかにすることとしたい。学校教育には、不平等を悪化させる側面、容認する側面、解消する側面が混在していることが想定できるが（Downey & Condon, 2016）、非都市部の高校は進学格差に対してどのような機能を果たしているのだろうか。先行研究での蓄積の薄さを鑑みて、まず本稿では高校における実践を丁寧に記述し、説明することで実態把握を試みたい。その際には、都市部において観察される偏差値輪切りの高校間トラッキングとの比較の視点も導入し、地域の高校教育システムとの連関を意識することで、非都市部における進路指導の特徴と困難性をより精緻に体系化することを目標とする。

本稿は、「教育における多様性と包摂性」というテーマに対して、地域における教育機会の保障

の視座から次の通りアプローチするものといえる。まず、「多様性」については、これまで明るみに出ることの少なかった地方県の非都市部という地方の中の「多様性」を丁寧に見ていくことにより教育機会保障を巡る地域枠組みを適切に拡張する。そして、「包摂性」に関しては、地方県の非都市部において、生徒への進学機会提供をサポートすることが期待される高校の進路指導が教育格差を縮小する側面での「包摂性」にいかなる役割を果たしているのか、そこにはどのような困難が存在するのか詳らかにする。

以下では、次の通り論を展開する。2 節では、これまでのトラッキング研究、その中でも特に高校の進路指導に関する研究について概観した上で、地方県の非都市部における進路指導がトラッキング構造との関連のもと捉えられてこなかった限界を指摘し、それを踏まえて本稿における分析課題を設定する。3 節では、本稿で用いるデータと方法を記述した上で、対象について説明を加える。4 節と 5 節は分析パートである。4 節は非都市部のトラッキング構造を背景にいかなる進路指導の方向性が立てられるのか、それによりどのような進路指導実践が行われているか確認する。その上で、5 節では 4 節で指摘した非都市部の高校における進路指導の目標や方針がある面では生徒の進路指導の落とし所としてネガティブに作用しうることを指摘する。6 節はまとめと考察として、本稿における結果を要約した上で、地方県の非都市部のトラッキング構造のもと高校の進路指導実践がいかなる様相を呈してしまうのか、都市部との比較の視点から考察するとともに、それが非都市部における大学進学機会といかなる関係を持ちうるか解釈することとしたい。

2 先行研究の検討と分析課題の設定

2.1 トラッキング研究の蓄積と課題

先述の通り、日本では受験競争など「高校格差」の弊害が目につきやすかったこともあってか(飯田 2007)、日本のトラッキングはすなわち高校「間」トラッキングという前提が置かれてきた。そうした前提のもと、現在に至るまで非常に数多くの研究が生み出されてきた(樋田ほか編 2014, 中澤・藤原編 2015, 尾嶋・荒牧編 2018 など)。その検討範囲は膨大になるため、本稿が関心を寄せる進路選択に関係する部分に絞りその到達点を示しておく、大まかに次の 3 つの方向性から議論が展開されてきた。

第一に、トラッキングを媒介因として、生徒の諸特徴がどのように社会的な不平等に結びついていくか明らかにする研究である。つまり、いかなる特徴をもつ生徒が、高校階層構造上のどのタイプ・ランクの高校に進学し、結果的にどのような高卒後進路に至るのかというルートを詳らかにしてきた研究群である。たとえば、高校進学を規定する生徒の特徴として家庭背景(藤原 2012 など)、性別(中西 1998)、成績(荻谷 1986)などが検討されるとともに、トラッキングがどのように社会的な地位に結びついていくかについてその時代的な変遷とともに解明されてきた(中西・中村・大内 1997 など)。

第二に、生徒の進路形成に高校教員がいかに関係してくるのか明らかにする研究である(千葉・大多和 2007, 酒井 2007, 中村編 2010 など)。その際には、とりわけ非進学校における進路指導実践が注目を集めてきた。近年、日本では大学進学率が上昇をみたが、それは従来大学進学に親和的でなかった層が進学するようになったことを意味する(中村編 2010)。進学に親和的でない生徒が進学に向かうためには、教員

側の支援や水路づけなど高校内の何かしらの要因が重要な役割を担っているのではないだろうか。このような発想のもと、非進学校に焦点を当てられてきたため、近年、注目度が高まっているテーマといえよう。それは、従来どの高校に進学するかで、その後の進路が大方決まっていたため、高校内の進路指導の役割はそれほど強いものと想定されづらかったためである。

第三に、総合選択制高校などの「新しいタイプの高校」や学区再編などの近年の高校教育改革が高校生の進路選択といかなる関係を持っているか従来との変化に着目して検討する研究が挙げられる(菊地編 1997, 望月 2007, 荒川 2009 など)。例えば、荒川(2009)は偏差値一辺倒の進路指導を是正し、生徒の多様な「将来の夢」を重視したキャリア教育に変化することは、実際には高校ランクの中下位校において行われており、上位校では未だ大学進学を念頭に置いた指導が貫かれていることを指摘する。そして、高校教育改革を通じて、高校階層の中下位層における進路形成がますます不安定化していくことに対して警鐘を鳴らしている。

紙幅も限られるため、上記で検討した研究はトラッキング研究のほんの一部に制限されるが、本稿の関心に照らした場合、従来のトラッキング研究には大きく次の2つの課題が残されてきた。第一の課題は、日本のトラッキングというと「高校格差」と置き換えられる傾向があり、トラッキング構造に地域差が生じる可能性について十分な検討がなされてこなかったことである(田垣内 2023)。しかし、容易に想像できるとおり、地域の高校数に応じて、「高校格差」の輪切り度合いの細かさには違いが生じる。つまり、同じく「高校格差」という構造が存在するとはいえ、地域の高校数の違いを背景として、偏差値の輪切り度合

いにはグラデーションが生まれる余地が存在するのではないだろうか。具体的に、高校が数十校存在する地域では、偏差値が70の次が68、その次が66というように序列が細くなるのみならず、同じ偏差値帯に複数の高校が存在することもあり得る。その一方で、たとえば高校が5校しかない場合、65の次が57というように、輪切りの度合いがかなり緩くなる。

上記の人口規模を背景とした単純な高校数の差異とともに、アクセスの良さを介した「高校格差」の輪切り度合いの細かさも考慮しておく必要がある。一般的に非都市部よりも都市部の方で交通機関によるアクセスが良い。そのことで、より広域の高校が一つの「高校格差」の体系に組み込まれることが想定できるだろう。これが、トラッキング構造の地域性において何を意味するかというと、都市部の高校は広範囲から(各高校の偏差値に照らした)生徒を集めることから、高校が位置している基礎自治体との関係性は希薄になりやすいのではないか、ということである。その一方で、非都市部の高校は数が少ないこと、またアクセスが悪いことに伴い地元の生徒を集めていることから、相対的に地域との関係を考える実践もありうるのではないかと考えられる。

本稿では進路形成を支える高校の進路指導を検討するわけだが、このようなトラッキングの地域性は各高校に配分される生徒の様相を少なからず変えてしまう側面があることから、進路指導の背景や実践の内実もそれに応じて変動する可能性はあるだろう。また、トラッキングの輪切り度合いが弱い非都市部で、大学進学率が低い現実も踏まえれば、教育機会の不平等を考える上で、地域性についてももう少し自覚的になった上で、トラッキングに関する分析課題の設

定がなされて然るべきであるように思われる。

第二の課題は、従来多くの研究で生徒側の要因から進路分化が検討される反面、教師—生徒関係のもう一方の側である教員側の要因の実態にブラックボックスな点が多いということである。たしかに、日本ではどの高校に進学するかでどのような高卒後進路を歩むかは大部分自明であるかもしれない。そのように考えると教員が生徒の進路形成にどのように関与しているか検討することの意義はそこまで大きくはない可能性はある。これは高校内部でどのトラックに割り振るか、そしてその後どのような進路に方向づけるかに進路カウンセラーなどが重要な役割を果たすとされるアメリカなどとは対照的な現実であろう (Cicourel & Kitsuse, 1963, Rosenbaum, 1976 など)。

そうした中、近年では大学進学率の上昇や高校教育改革などの潮流もあり、そこにおいて高校の進路指導がいかに変化し、どのように生徒の進路形成を方向づけているかが検討されてきている。そこでは、大学進学に親和的でない生徒を進学に向づける実践 (中村編 2010) や大学進学に水路づけることなく生徒の「夢追い」型の進路形成をそのまま容認する意味で大学進学率の高さとは相容れない実践 (荒川 2009) が観察されてきた。

その一方で、進路指導の地域的な文脈はそれほど注目されてきたとは言えないだろう (吉川 2001, 石戸谷 2004, 上地 2019 など)。すなわち、教育機会の平等を考える上で重要な論点となる大学進学率の低さが顕在化している地方県の非都市部の高校において、どのような背景のもと、いかなる指導の実践が行われているのかはほとんど明らかにされていない、ということである。進学に親和的でない生徒の大学進学機会の提供には高校の進路指導の存在が重要であることを

考慮するならば (豊永 2023)、生徒の要因と同様に高校の進路指導を検討しておく重要性が高いといえる。

たしかに少ないながら、地方の高校における進路指導実践は焦点化されてはいるものの (上地 2019 など)、具体的な側面に注目されることがほとんどであり、第一の課題で挙げたトラッキングの地域性という構造的な部分への着目が弱いと言わざるを得ない。ただし、具体的な指導実践はその背景としての構造的な要因にある部分左右されることから、そのような背景的な部分に着目することにより、より進路指導の内実も理解が深まるのではないだろうか。

2.2 分析課題の設定

以上の先行研究の検討を踏まえ、次の通り3つの分析課題を設定する。第一と第二がトラッキングの地域性を背景とした進路指導の目標や方針について、第三が具体的な進路指導実践についてである。

まず、第一に地方県の非都市部におけるトラッキング構造、つまり、(1) 地域に高校が少ないこと、(2) アクセスが悪く非都市部で完結した高校階層体系を有していること、の2点を背景に、高校はどのような進路目標を生み出すに至るのか明らかにする。非都市部では高校数の少なさから、実質的に「高校三原則」の総合制や小学区制に近い特徴を持つことが想定される。こうした教育システムの特徴を踏まえ、高校はどのような進路目標を定めているだろうか。

第一の点とも関連して、第二に非都市部のトラッキングの特徴 (インプット要因) として、生徒が各高校に輪切りされず、多様な生徒が一つの高校に集中することが挙げられる。これは都市部との比較でどのような指導上の背景を生み出して

いるだろうか。

第三に、第一と第二で見出したトラッキングの地域性を背景とした進路指導の方向性のものと、具体的にいかなる進路指導の実践が生み出されているのか検討することとしたい。本稿では、地域により異なるトラッキング構造を検討の範疇に収めることにより、これまでの一ランク上の高校へと「追いつけ・追い越せ」(竹内 1995) とする進路指導や、低ランク校からの大学進学をサポートする進路選択支援型の進路指導(千葉・大多和 2007)とは異なる進路指導の様相が現れる可能性について指摘する。これまで地方県の非都市部の高校ではリソースの制約から高校全体として大学進学率を高める実践が難しくなっていることが指摘されてきた(田垣内 2022)。ただし、リソースが制約されていることで指導の大枠が規定されるとしても、それが直接指導実践を決定するわけではない。そのため、非都市部における構造上の特徴にも目を向けつつ高校教員が具体的にどのような指導を行っているかについて内実に立ち入って検討しておく意義は認められるだろう。

3 調査概要・調査対象

本稿では、主にある地方県の非都市部に立地する X 高校において実施した教員対象のインタビュー調査データの分析を行う。教員インタビュー調査は、2021 年 8 月から 12 月にかけて、10 名の教員を対象としてそれぞれ 1 時間～1 時間半程度実施した。その際は、ベテランから若手まで非都市部の高校における教職員構造の特徴を反映できるように意識して対象者を設定した。本稿の関心に照らして、高校に在籍する生徒の特徴やそうした背景要因をもとにした指導の方向性や具体的な指導実践に着目してインタビューを実施した。

対象者の概要を表 1 に示した。

表 1 インタビューした教員の内訳

	性別	年齢	現在の役職	進路指導経歴 (X 校)
A さん	女	50代	主幹教諭	進路指導部、担任
B さん	女	50代	2年生担任 (特進コース)	担任
C さん	男	50代	進路指導主任	進路指導部、担任
D さん	男	50代	3年生担任 (特進コース)	担任
E さん	男	20代	3年生担任 (普通コース)	担任
F さん	女	20代	1年生担任 (特進コース)	担任
G さん	男	20代	教務、総務	なし
H さん	男	20代	2年生担任 (普通コース)	担任
I さん	男	50代	校長	なし
J さん	男	50代	人権教育主任	担任

続いて、調査対象について、対象地域と対象校に分けて説明する。対象県は、日本有数の工業地帯である都市部と農林水産地域である非都市部に明確な県内格差が存在するという特徴をもつ。そうした地域の社会的経済的条件を反映して、同一県内の他地域(約 45%)と比べて、非都市部である A 地域の大学進学率は約 30%と低い(2019 年度、高卒者基準)。

対象地域の選定にあたっては、都市部からのアクセスに注目した。なぜなら、都市部からのアクセスにより、同じ非都市部であっても都市部に近接している場合には、都市部のトラッキング構造の内部に組み込まれていることも考えられるからである。そのため、本稿では都市部とは独立しておおよそ非都市部のみで高校入試選抜が作用している地域を対象地域として定めた。

生徒数が少ない A 地域には高校が 3 校しかないため、ひとつの高校の進学実績が地域の進学率にダイレクトに結びつく。その中で、X 高校は地域から進学校と認識される旧制中学からの伝統ある公立高校であり、例年、大学進学率は 4～5 割、国公立大学進学率は 1～2 割である。ただ、市町村に存在する唯一の高校であることから、高校内の学力層は非常に多様である。このような多様な学力層に対応するため、X 高校には複数の学科・コースが並置されている。具体的には、普通科・特進コース(1 クラス、入学時点にクラス

分けのため偏差値不明)、普通科・普通コース(2クラス, 偏差値 53), 総合学科(1クラス, 偏差値 49)である(以上の調査対象に関する説明は田垣内(2022)を参照)。

各学科・コースの大学進学率は, 普通科・特進コース(約 90%), 普通科・普通コース(約 50%), 総合学科(約 20%)である。県都市部の同ランク帯の高校と比較すると, 特進コースは同等の進学率であるものの, 普通コースで 20 ポイント程度も進学率が低くなっている。普通コースはクラス数からいってもボリューム層であることから, ここにおける進学機会の少なさが地域差を生み出す主たる要因になっている(田垣内 2022)。そのため, 本稿の課題解決のために, 高校の全体的な構造にも視野を伸ばしつつも, とりわけ普通コースにおいてどのような指導実践が行われているか検討することが重要な視点になると判断した。

4 非都市部のトラッキング構造と進路実践

本節では, 非都市部のトラッキングの特徴として, (1) 高校数の少なさと, それによる(2) 生徒の多様性から整理し, それが高校の進路指導の指針や実践にどのような影響をもたらすか確認する。

4.1 「地域の高校」としての進路保障

地方県の非都市部には高校が少なく, またアクセスが悪いことから通学圏も広範囲には及ばない。そうした背景のもと, 非都市部の高校は「地域の高校」として, 地元の高校生を幅広く引き受け, 地域の多様なニーズを満たすことがその目標として掲げられやすい。実際に, X 高校においても, 「難関大進学～就職」までの多種多様な進路希望すべてを実現することを重視している(X 高等学校 2020)。このような地域の多岐にわたる進路希望を実現するといった目標は先行研究でも

指摘される場所であり(吉川 2001, 児美川 2013), ある程度非都市部に共通する事情のように考えられる。たとえば, 児美川(2013)が対象とした非都市部の高校では, 「大学進学から地元就職まで一人ひとりの進路希望実現に向けて指導」しているという。

こうした高校全体としての事情を背景に, ボリューム層としての普通コースでも, その進路目標は多様になる。普通コースでは「私立大学の文系学部(一部の大学の理系学部)や看護学校, 短期大学などへの進学」とある通り, 大学のみならず看護学校や短期大学が並列されており, その後には「など」という文言が続くなど多様な進路ニーズを包摂するコースとして存在している。

特進コースは「国公立大学, 難関私立大学の文系・理系学部への進学」, 総合学科が「就職と専門学校(看護系以外)への合格」と明記されていることを踏まえると, 普通コースは難関大学を除く幅広い進学を引き受けていることがわかるだろう(以上, X 高校ホームページを参照)。

また, 普通コースにおいて, 複数の進学先が並列されていることから, 必ずしも大学が序列において優位とは想定されていない可能性がある。実際に, インタビューでは, 多くの教員から私立大学とそれ以外の進路で好ましさに違いはないことが語られた(データ省略)。つまり, 多様な進路実現を保障することが「地域の高校」の目標として前景化しやすいために, 大学進学実績を高めていこうとする取り組みが普通コースでは前面には出てこない可能性が見出せる。

4.2 生徒の多様性とベクトル不在

前項では, 「地域の高校」として位置づく高校では, 多様なニーズを満たすことが目標となりやすいことから, より良い大学を目指してという業

績主義的な指導方針とは馴染みにくい可能性がみられた。こうした「地域の高校」という高校に付与された位置づけとともに、少し異なる側面として生徒構成からも、大学進学へと視線を向けていくことが難しくなる事情が明らかとなった。

まず、地方県の非都市部の高校における生徒構成について、高校教員がどのような認識を持っているか確認しておくこととしたい。すると、高校の少なさがもたらす高校内の多様性を縮減するため、高校「内」に学科・コースを併置する実践を行っているものの、それでもなお多様性の縮減には限界が伴うことが明らかとなった。それは国公立大学を目指すためのコースとして、たった1クラスのみ設置している特進コースでも同様であることが都市部との比較から指摘される。例えば、都市部の進学校で高校時代を過ごした若手教員であるGさんは次の通り述べる。

Gさん: ばらつきが大きいんですね。それは特進コースであっても同じです。全然違いますよね。〇〇(Gさんの出身校)はある程度勉強の得意な子が多いし、雰囲気作りが楽ですよ。〇〇からすると、特進コースであっても多様です。

特進コースであっても内部の多様性がキーワードとして数多く聞かれるのであるから、普通コースでは2クラス設置していることからなおのこと、多様性が大きくなる。以下の若手教員であるHさんの発言に読み取れる。

Hさん: 普通コースは幅が広い。なぜ特進コースを志望しなかったんだろうという子から、よう上から下まで一緒におるなっていう子まで、普通コースは中学校です。ね。

また、学力ランク的には一つ下の総合学科との比較も語られる。ベテラン教員のAさんの発言である。

Aさん: 総合学科の上の方が普通コースの下よりもすごく上ですね。下の方は総合学科のクラス数が減少したことによって倍率が上がって、それを避けて総合学科に行きたいけど、普通コースに来るという子も中にはいます。普通コースが一番多様ですね。

この通り、普通コースの下位層より総合学科の上位層の方で学力が高い背景には、地域的な文脈を背景に、学力は高くともそこまで熱心に勉強することを希望しない生徒が一定数存在する事情がある。以上から、大学進学実績を大きく左右する普通コースは多様性が強くなってしまふ。

それは次の普通コースに対する認識に鮮明に現れているといえよう。ベテラン教員のBさんによる発言である。

Bさん: 普通コースはやんわりふんわりでよくわからない。掴みどころがないですね。かわいそう。総合学科みたいに就職か専門学校かかって言ってもらった方が楽なんですけど。

特進コースは難関大学進学、総合学科は就職か専門学校と明確にその特徴が示されるのに対し、普通コースは「やんわりふんわりよくわからない」と特徴が曖昧になりやすい。相対的にコースの立ち位置が明確な特進コースと総合学科に挟まれ、普通コースは非常に多様な層を包摂している。

このように、非都市部の高校の中でも、とりわけ大学進学率を左右する普通コースで多様性が強く現れる可能性が垣間見えた。このような多様

性を背景に、普通コースでは指導のベクトルを設定することが難しいことが数多く聞かれた。次の若手教員の E さんから明瞭に語られている。

E さん：高 1 でここに行きたいという希望を持ってる生徒が半分もない。最初から旧帝大って言うようにいくことが難しく、動き出すのが遅くなる。〇〇高校（事例県の進学校）なら大多数は旧帝大やから、一律にこういう指導をすればついてくるというモデルが成立しやすいです。なので、授業を大事にして、評定を上げてという指導になりやすいですね。

多様性をもとにどの学力帯に照準を合わせて指導を展開すれば良いか判断がつきにくい。そうになると、一様に進学意欲を高めていくというような方向性には向かいづらい。

4.3 生徒の主体性に任せる進路指導

以上、4.1.と 4.2.で見出した事情を踏まえると、いかなる進路指導の実践がみられるに至るのであろうか。多くの教員からは、コース全体として何か一つの目標を設定するのではなく、生徒の主体性に進路形成を任せ、そのニーズを満たすような指導をしていることが語られた。

G さん：普通コースには主体性に任せると言う思いが強いし、高校全体としてもそうなっていますね。

多様性の大きな普通コースでは、指導のベクトルが設定できないために、生徒のニーズを満たすことが進路指導の方向性として最優先になってしまう。また、「地域の高校」として多種多様なニーズに応えることが目標のために、あえて一つ

の指標（「国公立大学〇名」など）を設定することは目標とはなりづらいだろう。

結果として、X 高校でも指定校推薦などの「軽量化した入試方法（中村 2011）」を経由した四大シフト現象（中村編 2010）はみられるものの、そうした入試方法の枠内でのシフトに制限されるため進学率の上昇には限定符がついてしまう。

5 非都市部における進路指導の落とし穴

4 節では、非都市部のトラッキング構造を背景に、(1)「地域の高校」として多様な進路ニーズを満たすこと、(2) 高校内の多様性から指導のベクトルを設定しづらいこと、の 2 点が事情としてあり、進学意欲を高めるのではなく、生徒の主体性に任せる指導となりやすいことがわかった。

たしかに生徒の進路ニーズを満たすことは、大学進学を生徒に押し付ける実践よりも、一見教育的に望ましい実践のようにも思われる。しかし、非都市部においては、進学に親和的でない層が多いことには目を向けて良い。大学進学という選択肢を持ちづらい生徒にとっては、主体性と言っても選択肢が限られた中での主体性であるに過ぎず、ひいては進学機会からも排除されてしまう。

そうすると、別の考え方として、たとえ生徒の多様性ゆえに一つのベクトルを設定することは難しいにしても、各生徒の学力や志向性に合わせて、その中でワンランク上の進路を目標として設定するよう方向づけることも指導の在り方としてありうる。たとえば、進路指導主事の C さんの発言はその一つとして解釈できる。

C さん：多様なニーズに対応するのは総合高校の宿命だが、生徒の学力に合わせたり、生徒の頑張りに合わせるような対応をするのか、持ってる能力を引き出して、高いレベル、将来

に必要な学習習慣を身につけることを目指し
て対応するのか、この差は大きい。

この発言にみられる通り、トラック内の多様性により、指導のベクトルを設定することが難しい事情はあるにせよ、それはそのまま生徒の主体性に任せた指導に直結するとは限らない。しかし、X 高校では生徒の「持つて能力を引き出すような実践をするかどうかは教員個々の裁量に任せられ、以下でみる二つの要因（「地域の高校」が落とし所となる実践」、「特進コースの存在による隠れ蓑」）を背景として高校全体としては進学指導へと力を注ぐことはしない様相がみてとれた。以下で検討していこう。

5.1 「地域の高校」が落とし所となる実践

X 高校は、「地域の高校」として「難関大進学～就職」の多種多様な進路ニーズに対応することが目標として掲げられていることは先に見た通りである。たしかにそれは目標となりうるのだが、そうした特徴はより良い進路を選択するよう丁寧な指導をしないことの口実としても使われる危険性が教員からいくつか聞かれた。つまり、「地域の高校」として多種多様な進路ニーズに対応する学校だからこそ、生徒の主体性に任せた指導を行うことが、納得を得られやすい構造にあるということである。C さんの発言である。

C さん：進学から就職までという多種多様に
応じたというのが一番の落とし所、楽しんで指
導できますよね。全員が進学になれば丁寧な
指導が増えてくる。結果を出さないから、お互
いの指導にカモフラージュできる。

X 高校は、「進学から就職までという多種多様

に応じ」ることも求められるため、それに比して
指導目標が設定しづらい。しかし、それとともに、
進路結果に対する責任も曖昧となりやすいこと
がここから読み取れる。それを経て、「結果を出
さないから、お互いの指導にカモフラージュでき
る」という事態が生じることも理解できる。

非都市部の中でも特進コースではなく、普通コ
ースであれば、より学習や進学に親和的でない生
徒が多いだろう。そうした状況の時、それらの生
徒の学習・進学意欲を高めていく実践には負荷が
つきまとう。そうすると、非都市部の高校におけ
る教員リソースの少なさも相まって（田垣内
2022）、普通コースにおいて主体性に任せた進路
指導というフレーズは多くの教員にとって受け
入れやすいのではないだろうか。

5.2 特進コースの存在による隠れ蓑

続いて、X 高校にはより学力ランクが上の特進
コースが存在することにより、普通コースの進学
実績が問われづらくなる構造が存在することが
みてとれた。以下で検討してみよう。

地方県の非都市部では生徒数急減に見舞われ
る中、X 高校は高校存続の危機に瀕している。そ
うした中、特進コースから一定数の国公立大学合
格者数を出すことによる特色化を明確な目標と
して設定している。これはほとんどの教員から聞
かれる共通した目標となっており、特進コースか
ら国公立大学合格者を輩出することで高校とし
ての説明責任を果たしている（田垣内 2022）。

その一方で、そのような特進コースが存在する
ことは、それ以外の学科・コースにおける進路実
績を問われづらくなる構造を生みしている可能
性が以下のインタビューデータに現れてくる。

D さん：教員側にも責任あるかもわかんない

んですよ。だから特進コースは国立入れなきゃみたいなプレッシャー感じてますよ。教科担当者もそこはプレッシャー感じてんですよ。だから。適当にやるわけにいかないということで、教材研究もすごくやってもらってと思うし。だけど、普通コースについては、その大きな声で言えないでしょうけど、楽しくやればいいのかという感じ。(中略) 普通コースの子はなんだろう、力つかないとか勉強しないって言うてるのはこちらがそれでもいいんだっていう諦めとか妥協とか、それ持ってるんじゃないかっていうのを感じることもあるんで。

特進コースの合格実績で高校としてのアイデンティティを明確にできれば、それ以外の学科・コースでの進路形成は相対的に重点が置かれづらくなる。つまり、特進コースがある面では隠れ蓑となってしまうのである。非都市部の高校では、特進コースによってひとまずは高校としての特色化が可能となってしまう。そのため、学力帯としてその下に位置づく普通コースにおける実態がどうあれ、そこへのアプローチが後手に回ってしまうということも十分にあり得るのではないだろうか。このように複合的な要因が絡み合いながら、普通コースにおける進学指導は困難性を極める事態に陥っていた。

6 まとめと考察

本稿では、地方県の非都市部の高校における進路指導が生徒の教育機会の提供に果たす役割の高さについて確認した後、実態として高校の進路指導がどのようになっているかについて確認してきた。本稿により明らかとなったのは、主に次の3点である。

第一に、X 高校は地域の数少ない高校として、「難関大進学～就職」の多種多様な進路ニーズを満たす「地域の高校」としての役割を果たしていた。そのため、必ずしも大学進学を好ましいとする方針はなく、少しでも高い進路を目指してという指導が行われない可能性がみられた。

第二に、X 高校では生徒の多様性を小さくするための実践として、高校「内」トラック編成がなされているが、それでもなおトラック内の多様性は非常に大きいことが明らかとなった。その中でも、特に大学進学率を左右するボリューム層としての普通コースにおいて多様性が大きくなってしまいう構造が存在していることが読み取れた。このような多様性を背景に単一の指導目標や指導のベクトルを設定することが難しく、一概に高い進路を目指してという方向性には向かいづらいうことが見出せた。以上、第一の点と第二の点を背景として、生徒の主体性に任せた進路指導を行なうことがわかった。

第三に、オプションとしては個々の学習・進路意欲を高めた上での主体性もありうるなかで、おおよそ生徒の持ってきた希望をそのまま認める実践が行われているのは、教員リソースの限界もありつつ(田垣内 2022)、「地域の高校」という理念が指導の落とし所になることや特進コースが別に存在することによる隠れ蓑となることが指摘された。つまり、「地域の高校」として多種多様な進路ニーズを満たすことを念頭にすれば少しでも高みを目指してという指導をしないことの口実になりうるとともに、特進コースが実績を挙げてさえいれば、普通コースの実績がどうあってもそれは目立ちづらくなる^②。

日本のトラッキングは、生徒が学力により標準化された形式で階層化される教育システムの一次元的階層性にその特徴がある(多喜 2020)。そ

ここでは、入試偏差値のみを参照して、加熱・冷却・再加熱されることが理念型として指摘されてきた（竹内 1995）。都市部では、高校数が多く、また基礎自治体を超えて広域から生徒が集まってくることを念頭におくと、地域との関係は弱くなり、少しでも良い進路へという進学実績が高校の特色化につながるだろう³⁾。

その一方、非都市部では高校数も少なく、アクセスの問題から基本的には近隣の生徒を集めることが基本的となる。そうすると、一つ上の偏差値帯の高校を目指してというような指導よりも、地域の多種多様な進路ニーズを満たすという地域に果たす役割が前面に出やすいだろう。こうした非都市部の進路方針はこれまでもいくつか見出されてきたが（吉川 2001）、地域における平均的な大学進学実績の高さという変数と絡めたときに、そうした指導方針がネガティブな関連を持ちうる可能性があることは重要な知見である。

また、生徒構成の面でも都市部との比較で捉えると、次のような見方が可能となる。つまり、高校「間」トラッキングでは高校が輪切りとなっており、各高校にそれぞれの学力帯の生徒が進学していくため、高校内の学力帯が均質になる。そのため、教員側にとってもどこに照準を合わせて指導をすれば良いか判断が容易になり、それぞれの偏差地帯に合わせて理念的には「追いつけ・追い越せ」の層別競争移動（竹内 1995）に即した指導をすることが可能となる。

他方で、結果が数値で明確になるために、教員側としても、例年と比べた、あるいは一つ上や一つ下のランクの高校と比較した、もしくは他の地域の同ランク帯の高校と相対的に、というように進路結果の判断材料が数多く存在するため、指導の熱心度は高くなると想定される。

しかし、地域に高校が少なく高校内が多様にな

る地方県の非都市部では、都市部のように偏差値に合わせて進路のベクトルを設定することは難しいとともに、進路結果の責任も問われづらい構造にある。ここで重要なのは、進学に非親和的な層が多いと考えられる地方県の非都市部において、それをサポートする役割も期待される高校側も多様性ゆえに指導が困難となっていることであろう。

たしかに、「地域の高校」としての立ち位置や高校内の多様性による指導の困難性自体はそれほど目新しい知見ではないかもしれない。なぜなら、日本における総合選抜制度や学校群制度、また小学区制度のもとにある高校や、アメリカを代表とする他国の総合性高校（Cicourel & Kitsuse, 1963 など）でも広くみられる事態であるからである。ただし、ここで重要となってくるのは、日本のトラッキングにおける主流が高校間格差であり、それによる効率的な進路指導となっているという事実である。たとえば、高校の少なさによる高校内の多様性が全国的に共通とするならば、非都市部であっても進学不利は顕在化しづらいかもしれない。アメリカではどの地域においても、高校「内」トラックがみられることから、高校「内」でリソースを配分することによる地域間での不利は表面上見えにくいだろう。しかし、日本では高校間トラッキングが主流となっていること、そうした構造のもとでは効率的な指導が可能となっていることを踏まえるならば、それとの偏差で見た時に非都市部の高校における多様性を背景とした進路指導の実践が一層際立つのではないだろうか。このように都市部との合わせ鏡で非都市部における高校「内」トラックをみると、同じ高校「内」トラックをみても国によりその実態は大きく変わりうるのである。

本稿は以上のように、田垣内（2022）が指摘し

ている非都市部の高校におけるリソース不足とはまた異なる視点(「地域の高校」としての理念、多様性からくるベクトルの不在)からその指導の困難性を明らかにした点,そして都市部との偏差でみることの重要性を指摘した点に意義が認められよう。

とはいえ,本稿は次のような課題を残す。第一に,都市部の高校における指導実践はモデル的に示すにとどまり,実証するには至らなかったことである。この点を検討することで,非都市部ならではの事情もより鮮明に映し出すことができるように思われる。そして第二に,進路指導実践を受け取る側の生徒側の要因を検討できていないことである。進路指導を熱心に行なったとしてもそれがそのまま生徒の進路意識につながるとは限らないし,また生徒側の要因を背景として高校の進路指導方針が定められる側面もあるだろう。今後は上記の点についてさらに検討を広げていくことで,未だ謎に包まれた部分の大きいトラッキングの地域性について理論的に精緻化することを課題としたい。

注

(1) 本稿は,必ずしも地方県の非都市部における大学進学率が高まれば良いという価値認識に立っているわけではない。大学進学は地域移動とともに生起することから,それは非都市部における過疎化のさらなる進行を引き起こす可能性が高い。ただし,大学進学の社会的地位に対するメリットが明確に実証されているという事実には目を向けて良いだろう(豊永 2023)。このような知見を考慮すると,一概に進学率が高まるよう取り組むのが良いとは主張しないが,大学進学という選択肢が非都市部にもう少しあって良いとも考えられ

る。本稿は,こうした考えのもと,まず前提として,非都市部の高校ではなぜ進学率が低いままとどまっているのか,高校内部ではどのような指導がなされているか,について実態把握することを目標として据えている。

- (2) これは教員批判ではないことはあえて付け加えておきたい。そうではなく,非都市部の高校教育システムの特徴(高校数の少なさ,高校「内」トラックの存在)という構造を背景とすれば,本稿が見出した実践が行われてしまう蓋然性が高まってしまふことを述べておきたいのである。
- (3) たしかに近年では,「在り方生き方指導」が広がっていることを踏まえると(望月 2007),都市部でも偏差値重視の指導が行われづらくなっているのかもしれない。しかし,非都市部との比較からは,偏差値重視の進学指導が高校の特色として魅力的になりやすいことは変わらないだろう。

引用文献

- 荒川葉 (2009) 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学』 東信堂。
- 千葉勝吾・大多和直樹 (2007) 「選択支援機関としての進路多様校における配分メカニズム」 『教育社会学研究』 81: 67-87.
- Cicourel, Aaron V. & Kitsuse John I. (1963). *The Educational Decision-Makers* (= (1985) 山村賢明・瀬戸知也訳『誰が進学を決定するか—選別機関としての学校』 金子書房)。
- Downey DB, Condrón DJ. (2016). Fifty years since the Coleman Report: rethinking the relationship between schools and inequality. *Sociology of Education*. 89:207–20.

- 藤原翔 (2012) 「高校選択における相対的リスク回避仮説と学歴下降回避仮説の検証」『教育社会学研究』 91: 29-49.
- 樋田大二郎・荻谷剛彦・堀健志・大多和直樹編著 (2014) 『現代高校生の学習と進路—高校の「常識」はどう変わってきたか?』 学事出版.
- 飯田浩之 (2007) 「中等教育の格差に挑む—高等学校の学校格差をめぐって」『教育社会学研究』 80: 41-60.
- 石戸谷繁 (2004) 「ローカリティを生きる—「郡部校」生徒の進路選択」古賀正義編著『学校のエスノグラフィ—事例研究から見た高校教育の内側』嵯峨野書院, 93-119.
- 上地香社 (2019) 「地方からの大学進学における日常的な進路指導—教師と生徒の認識に着目して」『日本高校教育学会年報』 26: 72-81.
- 荻谷剛彦 (1986) 「閉ざされた将来像—教育選抜の可視性と中学生の「自己選抜」」『教育社会学研究』 41: 95-109.
- 吉川徹 (2001) 『学歴社会のローカル・トラック—地方からの大学進学』世界思想社.
- 菊地英治編 (1997) 『高校教育改革の総合的研究』多賀出版.
- 児美川孝一郎 (2013) 『高校教育の新しいかたち—困難と課題はどこから来て、出口はどこにあるか』泉文堂.
- 望月由紀 (2007) 『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪—高校進路指導の社会学』東信堂.
- 中村高康 (2011) 『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会.
- 編 (2010) 『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房.
- 中西祐子 (1998) 『ジェンダー・トラック—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社.
- ・中村高康・大内裕和 (1997) 「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層—1985年 SSM 調査データの分析を通じて」『教育社会学研究』 60: 61-82.
- 中澤渉・藤原翔編著 (2015) 『格差社会の中の高校生: 家族・学校・進路選択』勁草書房.
- 尾嶋史章・荒牧草平編 (2018) 『高校生たちのゆくえ—学校パネル調査からみた進路と生活の30年』世界思想社.
- Rosenbaum JE. (1976). *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking*. New York: John Wiley & Sons.
- 酒井朗編 (2007) 『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房.
- 多田洗平 (2019) 「北海道における教育機会の地域格差—パス解析による学区別検討」『教育福祉研究』 23: 39-62.
- 田垣内義浩 (2022) 「地方県の非都市部からの大学進学—低進学率地域の高校におけるリソースの制約と傾斜配分」『教育社会学研究』 110: 215-235.
- (2023) 「市町村規模によってトラッキング構造はいかに異なるか—地方県の非都市部における高校教育の供給構造」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 62: 印刷中.
- 竹内洋 (1995) 『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会.
- 多喜弘文 (2020) 『学校教育と不平等の比較社会学』ミネルヴァ書房.
- 豊永耕平 (2023) 『学歴獲得の不平等—親子の進

路選択と社会階層』勁草書房.

X 高等学校 (2020) 『百年史』.